

---

# 歪（短編集）

梢田 佑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

歪（短編集）

### 【Nコード】

N7283H

### 【作者名】

梢田 佑

### 【あらすじ】

奇妙にゆがんだ「へんなはなし」短編集。一話がかなり短いです。

（他サイトで掲載済みの作品が多いです）

## 1：服

ふいに女たちはドミノ倒しとなり、ステージ上を滑り落ちていった。ひとりの女が両手でとっさに顔をかばうと、ほかの女たちが次々に彼女にのしかかり、肉体だけではなく服装の重みで骨の砕けた音がした。

幸運な女は不幸な女たちをあざ笑うように、飄然と舞台挨拶に向かった。彼女の装いも決して軽量なものとは言えなかったが、人々が惜しむ大金を費やし、質のいい生地を厳選していた。いまや、三枚目まではユニクロ、四、五枚目は専門店、六枚目からようやくブランドを着込むことが常識だが、彼女はそうはしなかった。十枚すべてが特注品だった。そうすることで機敏性も大きく上昇し、同じ枚数だけ着込むなら、彼女に断然ツキがまわる。

彼女の主演作おきるひとはアカデミー外国映画賞を受賞し、限界に近い十三枚着込みのパジャマで若者を中心にカルト的支持を得た。だから彼女が幸運な女であることは当然だった。不幸な女たちは彼女を恨めしく見つめていた。低コストで仕上げた十枚着込みは重く、ステージに上がることさえままならない。

彼女はマイクを握る。

「かのスピルバーグも言いました。いまは身体を隠す時代。見せるのではなく隠すこと、重ね着こそ女のステータスですわ」

歓声が飛び交い、幸運な女はほほえむと、小さく頭をさげた。目深にかぶった帽子がステージに落ちたが、彼女は拾おうとしなかつ

た。常に五つの帽子を重ねてかぶっている彼女の素顔は、生涯にわたって誰にも知られることはなかった。

(終)

## 2：赤い月がでている

泣き叫ぶつもりだったのにわたしを含めてほとんどの人間は泣かなかった。細くちいさな心がゆれるのを感じた。

その日世界のすべてがほろびた。隣人がばたばたと洗濯物を取りこみ、飼い犬が雄叫びをあげるのを聞いた。手からすべりおちたコートが真っ赤に染まった。わたしはなすすべもなく世界がほろびるのを見守り、ラジオが徐々に途絶えることを受け入れた。

向かいの家に住む少女が赤い髪をはためかせ、半狂乱に道路に飛び出しうずくまった。ついに全身を赤い色彩がおおうころには、少女は声を出さなくなった。わたしは震える指で本をめくり、その滑稽さにわらう。

わたしは既に赤みが差しはじめ、本をめくるたびに爪が毒々しく輝いていた。色はやがてはわたしを食いつぶし、あの哀れな少女のように、なんの言葉も喋れなくなる。

ついに夫と食事をとることをやめる。部屋にうずくまり本をめくる。カーテンを閉め切った暗い部屋で、それでも日に日に赤くなる自分を耐えきれない思いで感じる。扉の向こうでは夫がやさしく声をかけている。

「きみのぶんの食事を作ったんだ。出ておいで。せめてなにか飲まなきゃだめだよ」

とんでもなく腹が立って、わたしはヒステリックに叫ぶ。

「いいのよ。そんなのいらないの。どうせわたしは死ぬんだから」

夫の声がやみ、ようやく手に入れた平穏な世界でわたしは本を広

げる。いまや肩にまで広がった赤色に、それが本来の自分だと言いつき聞かせる。

しかし夫は、その後もなんらかの口実をつけてわたしを部屋の外に引きずりだそうとする。わたしにはそれがたまたまなくおそろしく、たくさん苦痛を言葉にして理解させようとする。夫は赤色が好きだと言う。もちろんそれは愚かな嘘だ。

「おぞましくつてしょうがないのよ」扉に向かって声を張り上げる。「ほんとうに赤いの。このまま死んでしまったほうがいいのよ、こんなんじゃない！」

夫は扉越しに、おもに景色について話した。隣人とそのまた隣人が世間話をしていること、木々がゆれて春の匂いがすること、獰猛な犬が家を通りかかったこと、取り留めのない話ばかりをする。夫はわたしが外に出ることをあきらめた様子だった。

わたしは徐々に、自分が喋られなくなっていくのを感じた。夫の話聞きながらこのまま死んでいくのだなと感じた。お気に入りの本はすべて赤く染まり、部屋中が色素に埋もれている。残酷だがどこもなく魅惑的な風景だった。そのときのわたしはヒステリックでいることに疲れ果てていた。

わたしはおそろおそろ立ち上がり、赤くない犬や春の匂い、隣人とそのまた隣人の世間話を思い、ゆっくりと扉を開いた。ひどく古めかしい音がして、赤い風が吹き込み肌をなでた。

家は赤く塗れていた。

用具や家具もそこに溶け込み、上下の見分けがつかなくなるほど、赤い景色となっていた。しばしそこで少考し、事実を受け入れたあとには痛いほどの静寂が待ち受けていた。

世界のすべては赤くほろんだ。憧憬の色は消え、ただ赤くほろんだ。窓辺にたたずみ、かつての地面の色を思いだそうとした。上手くいかずに、わたしは悪態をつきながら部屋に戻った。

廊下に夫が寝そべっている。もはや景色と一体化しそうなほどに赤い。浮遊する視線があつちこつちへ動き、ピントを合わせようと躍起になりながら、視線はわたしを捉える。

「ああ、よかった」夫に声をかけられる。わたしはどうすればいいのか分からず、その場に立ちすくむ。夫はぼんやりとしている。「きみに話したいことがあつたんだ」

夫はわずかに息を吐き出す。赤い吐息が外気に溶け込んでいく。「今日はいいい日だ」と言う。それからしばらく外の世界に関して、すてきで愚かな嘘をつく。

(終)

### 3：シャベルを手にして

知らない女と寝たうえに、彼女の首をうっかり絞めてしまった。彼女はいまやぐったりと息絶え、膨張した舌に生前の面影は見当たらない。男はただ途方に暮れ、ニコチンガムを口に入れる。死の臭いは生ごみと似ている。ただし、もっとキツイのだが。

六歳上の妻は彼女を土に埋めろという。それも実際、かなり良いところまではいった。だが近所の目が気になった。男は女の死体を車まで運ばなかった。妻は怒り狂った。

「あんたは毎回そうなのよ」

男は狼狽する。「なに言ってるんだよ。これが初めてだよ」

「うそおっしゃい。わたしがいままで何度耐えてきたと思ってるの？」

五歳になったばかりの子供は、母親の剣幕にただならぬものを感じ、おとなしく寝室へ向かう。子供は打算的である。母親の怒りが父親で発散されることはよく分かっている。男はその後ろ姿を見つめていたが、妻に一発殴られる。

「我慢できないわ。あんたにはコリゴリ。おまけにこんな」妻は女の死体を指差す。「余計なことをしてくれたわね。あんたが捕まることでわたしたちがどうなるのか、考えたことはある？」

妻は賢い女だった。妻の求めるものがそれなのだと思いつくまで、男は長い時間を要した。そして、気付いたときには後戻りができなかった。妻は知識を求め、他のものを求めたことなどなかった。

男は一度目の不貞をラブロマンスと称した。二度目の不貞を成り行きと称し、三度目を殺人と称せざるう。男はシャベルを手にする、カーペットに寝転がった死体を引っつかんだ。

死の臭いがする。

「パパ、その女のひと大丈夫なの？」

子供がこっそりと扉から顔を覗かせた。男はうなずく。母親似のその子供は、うそを信じた様子はない。男は死体をおかき、外の暗闇へと消える。寒空に白い呼吸が浮いていた。

男は無意識にニコチンガムを取り出すと、勢いよく噛み切った。子供はもちろん、妻さえも、男の行為を応援するでも非難するでもなく、結局のところ男はただ一人きりだった。寒気とともに猛烈な後悔におそわれるが、だれも男を慰めなかった。

代わりに、死んだ女の声がよく聞こえてきた。「今日はすごい日よ」おそらく何十人もの男に同じことをいつているであろう、あまりにもこなれた笑顔。

「人生にはときどきそういうことがあるけど、今日で二回目。一度目は母さんが男と死んじゃった日だから、あまりいい思い出ではないけど。でも、とにかく、今日はすごい日だった……」

(終)

#### 4：テープ1から5について

だからわたしは、ことさら奇妙に思うのである。彼らのロジックを受け入れ、実行することに、彼らは一切の違和感を覚えていないようである。わたしは既に解体し尽くされていたが、彼らの曖昧なロジックは、最後の砦を壊すようなもの。テープ3。だからわたしは彼らの、彼らが誇る感情の認識力に、意義を唱える者である。

女は三人の通行人を殺し、何食わぬ顔で出頭した。取り調べにも的確に、かつ簡潔に答えた。そして彼女はテープを送った。まるで人に聞かれることを意識していない、まとまりのない言葉が録音されており、一週間後、それはテレビでも報道された。

彼女は時折、拘置所で、ゆっくりと身体を揺らした。そして歌をうたいはじめた。それもテレビで報道された。調べたところによると、女は知的障害者ではなかった。むしろ、高いレベルでの知能を有しており、障害者のようにふるまう彼女を、世間は悪と定義した。それでも彼女の歌は止まらなかった。

テープ1。いちばん嫌いなのは触られることである。肉体的に、精神的に、そこに自分があると感じさせられる行為にわたしは悲鳴を上げる。わたしは踏み止まろうとし、彼らを理解しようとし、彼らの輪郭をまるで機械的になぞる。肌色の粒子が感じられ、やがてわたしはわたし自身の感覚を遠くへ追いやることができ。

無意味で曖昧なものはわたしの世界には入れず、しこりとなって沈殿する。彼らの感情は常に無意味で曖昧なものだった。わたしが奇妙に思うのは、彼らがお辞儀をし、握手をすること、視線だけで意

思を通じ合えること、わたしにはそれができないこと。

女は青年期のほとんどをクローゼットの暗闇で過ごした。闇のなかには彼女の好きなもの、静寂と自意識があふれていた。大好きな童謡を口ずさむとき、これは他人に知られてはいけないことなんだというのには理解できた。彼女は歳を重ね、クローゼットの代わりにアパートを借り始めた。自分だけの世界にはカラフルな家具をあしらえた。

ホテルの接客業は、ただ慣れないことではなかった。笑顔も、感じの良い対応もできたが、予期せぬトラブルには困惑した。女はしばらくのうち、なぜ人によって反応が違うのか、同じ感情の上になり立たないのか、確固たる理由を作れなかった。ただ上司の指示を飲み込んだが、それも場合によっては間違いとなった。女は柔軟であることの必要性を理解できなかった。

唐突に、仕事に慣れが生じはじめたへと、周囲の人間が思ったのは三週間後、女が制服に着替えた瞬間だった。厳密には、そこにいるのは女であって、女ではなかった。彼女は自分を柔軟な人間だと定義した。柔軟な彼女は触れられることを拒まなかった。トラブルへの対応も適切だった。周囲は彼女を、変わり者だと言って敬遠した。

テープ5。最後に、彼らを殺害したことについて、わたしはいかなる弁護も許されるべきではないだろう。彼らは間違いなく生きていたからで、わたしに彼らのものを奪う権利はなく、まるで以前のわたしのように、だが、わたしよりはるかに理解できるものとして、彼らを癒せるものはないことを、わたしは知っているからだ。

そうしてわたしは死に至る切符を手にし、テープの録音を止める。

女は外の世界に限りなく近づこうと努力し、どうすればこの違和感を払拭できるのかと悩み、カラフルな布団に顔をうずめ、息を吐きだした。彼女は常に世間との隔たりのなかに存在していた。それは厳密には彼女の心のなかだけだったが、意識すれば無限の隔たりにも思えた。人との会話も感情的なやりとりも、ただ予測できない不安定なものでしかなかった。そしてカラフルな世界にはたくさんの友達　ブルー、グリーン、ピンク、オレンジ　が出迎えてくれた。女はすすり泣き、そんな自分が疎ましかった。

仕事先では、恋人と呼べるひとりの男ができた。じっさいには利用されているだけだったが、女は、なんの感情も見えない人々のなかで唯一、明確な愛をささやいてくれる男を愛していた。ふたりは一緒に歌をうたった。定期的なリズムは彼女の孤独を癒し、ほんのわずかだったが外の世界へ踏み出せた。

男が彼女を裏切ったのは、彼女が男を裏切ったこととほぼ同時期だった。彼女は男の目に宿る光に気付いた。男が自分とは違う、彼らの世界で生きる人間なのだと気付いた。そして彼女は男を裏切り、男は彼女を裏切った。

そして女は自室に飛び込み、二度と外には戻らないと、じつとベッドに横たわった。

テープ2。彼らの行動とそれに伴う感情は、彼らが提示するロジックを受け入れれば、あるいは理解できるのだろうか。わたしにとつて彼らの行動はまるで無意味で、規則性のない衝動に思える。そしてそれを押しつける彼らこそ、世界に対する違和感そのものなので

ある。

最期の夜も女は、独房で身体をゆらし、お気に入りの歌をうたった。女の大好きだった暗闇は、最後まで女を裏切ることにはなかった。

残忍なビデオは彼女を壊さなかった。いわれのない憎悪も、嘲笑も、彼女を変えるには至らなかつた。彼女を壊したのは孤独だった。そして彼女は、テープのなかで今でも、回り続ける。

テープ4。色とりどりの光がある。彼らのロジックでは、幻覚であり、それはただの無色である。わたしは光に歩み寄り、ブルーとグリーンの間を横たわる。疲弊の波は常に、例外なく満潮であり、そこに月はなく、よせてはかえすことも、干潮になることもない。だからわたしは思うのである。彼らの海に月があるなら、消えたり、喪失することもないのである。それは先天的なものであり、また特殊で、異質な世界なのではないか。

わたしと彼らの間には、絶対的な隔たりがあり、わたしはそれを越えられないが、彼らもまた、越えられないのではないか。カラフルな世界に、決して触れられないのであるなら。

(終)

## 5：バナナ

つる、としてから衝撃が走る。景色の暗転。

「バナナの皮のことですが」

ぼくははじめてクレームのための電話をかける。

「すべりやすいなんてものじゃありません。ありゃあなんとかならないんですか？」

「お客さん、バナナの皮なんてのは、避ければいいんですよ」  
「がちゃん。」

ぼくはその日、バナナを一房たべきつて、アドバイスを実行した。それは悲惨な結果に終わった。

「バナナの皮のことですが」

退院後、ぼくはまた電話をかける。

「販売中止にしてください。切実なはなしです。もしもあなたがたがこれを見れば、たくさんの人が死にます」

そこで通話を断られたので、ぼくはあきらめることにしてバナナを買いに出かけた。

「あのおやじバナナ四つも買ってる〜」

「ありえな〜い、っーかきもくね」

彼女ら女子高生四人組が、スカートの下の美脚をたえまなく交差させてやってくる。ぼくはドキドキしながらバナナを握るが、女子高生はそのまま行ってしまふ。

「バナナのことですが。バナナ食っている姿を思いえがき、ぼくは必死に願いましたが、彼女らはけっしてバナナを食ってはくれませ  
ん」

「告白したら？」

クレーム処理担当の男はおだやかにいう。

ぼくはバナナを食いながら息を荒げる。なんて横暴な言いぐさ！  
しかしそのとき、受話器を持つ手をゆるめて、ふとカレンダーに  
目をとめた。

た。 たくさんの実写の動物たちの背後に、りんごのイラスト、みかんの  
イラスト、それにバナナ。in 10月のカレンダー。

ぼくは電話を切ると、そのカレンダーのイラストレーターを訪ね  
た。

「どなた？」

「質問があるのですが」

「名前をいわないと開けられないよ」

ぼくはバナナの皮を思いきり踏み込み、その勢いで窓をつきやぶ  
った。イラストレーターの男はキッチンへむかうと、しぶしぶなが  
らも熱いコーヒーを淹れてくれた。

「彼女らはなぜバナナを食べないのですか」

「仕方がないよ。最近の人は、バナナよりりんご、りんごよりクラン  
ベリーだから」

イラストレーターの男は即興でバナナを描いてくれた。

そのイラストは、以降、二十年間にわたってぼくを枕元でささえ  
続けた。

薄くなった頭髮のさいごの一本も、枕は受け止めた。

「今日もいい天気だなあ」

ぼくは朝食にバナナと、ココナッツミルクをたいらげ、ベッドに  
もどるとまたバナナを食べた。二十年後の世界でも、バナナはまだ  
まだ現役だった。クレーム処理担当の男はさいきんは若い女の子に  
かわり、電話をするとうざがられる。

バナナをぱくりと口にくわえる。

ベッドから立ち上がり、ぼくは玄関にむかおうとした。

つる、としてから衝撃が走る。それから、長い長い暗転。  
死がふたりを結ぶまで。

(終)

## 6：母に宛てて

土の香りと、あるいは日差しに、いまも心を躍らされますか。母さんへ。彼女の夢と、叶えられなかったすべての出来事に、胸を痛めていますか。

隣のおじいさんは元気ですか。いまでもお菓子をつくってあげていますか。あのおじいさんにはそろそろ、なにかやわらかいものがないでしょうか。紅茶のクッキーは硬すぎる。

母さん。ぼくの夢と、叶えられたすべての出来事に、きつと心から喜んでくれるでしょうか。母さん。シーツの匂いをかぎながら、ぼくの未来を思ってくれていることでしょうか。父さんは元気ですか。父さんの夢は叶いましたか。母さんはきつと、全力でそれを支えていることでしょうか。色々なものが変わりましたが、あなたのやさしさはいまでも感じている。そして彼女のこと。

あなたのがやさしさは、土の香りと、太陽の日差しを感じるたびに、彼女のことを思い出させますか。おじいさんは、いまでも彼女を愛していますか。夜の帳がおりるたび、彼女のことを思い出しているでしょうか。

隣のおばあさんは、いまでも彼女を愛していますか。おじいさんと同じくらい、彼女のことを思い出すでしょうか。けれどそれ以上に、母さん。あなたのがやさしさは、いまでも彼女を思い出させますか。彼女の失われた未来を思い、胸を痛めていますか。

ぼくの夢は叶いました。母さん。やさしさとは、だれかを愛することでしょうか。あるいは、限定的で、個人にしか向けられないものでしょうか。それはなにかの労わりに満ちていますか。

ぼくはいまでも、土の香りも、踏みしめたときの感触も、おそろしくてなりません。彼女はいまでも、ぼくの人生に存在しているのでしょうか。あるいはそれは、こっけいな罪悪感からくるものですか。やさしさとは個人的な愛情でしょうか。おじいさんはまだ元気

ですか。今度お菓子をつくるときは、やわらかいケーキを。ぼくは夢を叶えましたが、あの山奥で、彼女は消滅した。母さん。あのときの土はいまでも、彼女の夢を奪いますか。

(終)

7：父（前書き）

やや暴力的です。

## 7：父

ぼくがわずか六歳のころ、父さんの頭はぶつ壊れた。

厳密に言つと、ぼく以外の家族　母さんと祖母と弟　もみんなぶつ壊れていたけど、その原因たるものは父さんだったわけで、やはりここでは、彼について話すべきだろう。

前兆は、我が家での分煙だった。父さんの煙草の煙を、徹底的に父さん以外の人間から遠ざけようというわけだ。提案したのは父さんだった。扉のむこうで、たつぷりと時間をかけて煙草をふかし、家族の健康状態を異様に気にかけているさまは、うまく伝わるかどうかは分からないが、とてもおかしかったものだ。

静粛に。みなさんの聞きたいことも、よく理解している。

父さんが弟を殺したのは、ぼくが十一歳のころだ。誤解しないでほしいのは、それは犯罪や、虐待とは程遠く、むしろ崇高さを感じさせる儀式のようなものだった。七歳の弟はまっすぐ前だけを見つめ、父さんがおもむろに、カーテンを閉めた。赤いカーペットを何度か、神経質に敷きなおしていた。母さんは顔をそむけて泣いていた。お祖母ちゃんは、隣の部屋でテレビを見ていた。その部屋はあきらかに、ぼくがいままで知っていると知っていた部屋とはちがっていた。流れる空気もすべてが、異国の地から取り寄せたように、なじめなかった。

いつのまにか弟は、冷たくなって、赤いカーペットに横たわっていた。ぼくは父さんと一緒に弟を埋めた。そこで初めて知ったのだが、弟は母さんの子どもではなかった。それでもぼくが弟を愛していることに変わりはなかったが、母さんにとってはそうじゃなかったらしく、自分が産んだと思っていた息子の死から、次の日には立ち直っていた。

弟の出生について、ぼくは調べようとしたが 詳しいことは覚えていない。目の前に父さんがいた。「たとえ弟のことでも、ひとの事情はほじくりかえさないべきだ。分かるな。あしたはキャンプに行こう。誕生日はいつだ？」

キャンプでぼくは、母さんと寝させられた。父さんもそこに座っていて、ぼくがはじめて女性のなかに入るのを、じっと見つめていた。父さんはそのあとぼくをぶち、ぼくの目の前で母さんを抱いた。獣のような嬌声がテントに響きわたった。

真夜中になって、父さんと祖母が、ふたりしてテントを抜け出した。寝袋のなかでぼくは耳をそばだてた。茂みを掻き分ける音、すこし話し声。ふたりがテントに帰ってきたとき、全身にセックスの匂いを感じた。弟を産んだのは祖母だった。証拠はないが、まあ、まず間違いない。

家族が焼死体になるまで、ぼくは常に悪夢のなかだった。父さんは何度もぼくをぶった。母さんは、事あるごとにぼくを病院に連れ出し、精密検査を受けさせた。不必要な薬も飲まされた。

祖母は弟の死体を掘り返そうとした。彼の身体に突き刺さるからだと、シャベルは使おうとせずに、朝から晩まで、庭の土を掘り続けた。我が家は塀が高いが、さすがに近所の目が気になったのか、母さんは祖母を殺そうとした。刺殺や絞殺は、極めて感情的な殺し方だが、母さんは劇薬を盛った。あまり苦しんでほしくなかったのだと言った。母さんが主導権を握るようになったのはそれからだった。父さんは、祖母の命を助ける代わりに、母さんに新しい財布を買った。祖母はテレビを譲るようになり、すこし先の話ではあるのだが、料理も手伝うようになった。

父さんはぼくをぶたなくなつたが、その代わりに、母さんがぼくを引っ掻いた。それからお医者に連れて行って、寝ている間に自分

で傷つけるのだと言った。そして、ぼくが中学校から帰ってくるたびにセックスを強要した。お気に入りの音楽は、アレサ・フランクリンの「貴方だけを愛して」。愛、愛、愛、愛　　母さんはぼくとの行為に愛を見いだそうとした。

ぼくが高校にあがるころ、母さんは妊娠した。父さんはぼくを屋根裏に閉じ込めた。一回の食事と、二回のお仕置きとが、屋根裏ですごす一日のすべてだった。お仕置きは、母さんの身体にひとつ、切り傷をつくることだったが、そんなことはたいした問題じゃない。母さんの出産が、ぼくにほんとうの苦痛を与えた。ぼくはそのときも、屋根裏に閉じ込められ、一日に一回、お祖母ちゃんの料理を食べながら、今度のお仕置きはなんだろうと考えていた。

赤ん坊の泣き声がして、光が差し込んだ。父さんが階段を上ってきていた。腕のなかに、小さな赤ん坊を抱えて。彼らが屋根裏に上り終えたとき、ぼくは同時にいろいろなことを考えた。弟のこと。「貴方だけを愛して」。父さんの分煙。母さんのクリニク依存。そして、ぼくは、みなさんには分からないかもしれないが、受け入れなければならなかった。母さんが主導権を失ったこと、これから起こる苦痛と、死の臭い。

おもちゃでも見つけたように、赤ん坊はうれしそうに笑った。「俺にはちつともなつかない」父さんは言った。「それがどういうことか分かるな？　それがどういうことか」ぼくは静かにうなずいた。

銀色のナイフが手渡された。

父さんは、赤ん坊の腕を掴んで、ぼくに差し出した。ぼくは黙って、その白くふつくらした左腕に、ナイフを滑らせた。硬さのない赤ん坊の肌は、いともたやすく、傷付けられた。うつすらと血が滲んでいた。

赤ん坊が突如、笑みを引きつらせて、泣いた。しかし血は止まらなかつたし、ナイフは肌を刻み続けた。ぼくの手つきはすっかりし

ていた。奇妙なことだが、ぼくのなかで、父親としてはじめての義務を果たしている気分だった。赤ん坊の名も知らないのに。ともかく、ぼくは赤ん坊の右腕に、五つの切り傷をつくった。

「君はぼくが守る」ぼくは言った。「ぼくの子どもだ」

二週間後、赤ん坊は死んだ。父さんがレンジにかけて食ったのだ。脳みそが、軽やかな音をたてて爆発したらしい。ぼくは屋根裏から解放され、自室に戻された。母さんはぼくを指さし、ヒステリックにわめきたて、そのたびに父さんにぶたれていた。父さんはぼくを椅子に座らすと、一冊のアルバムを捲った。

「覚えてるか」

アルバムのページ目。赤ん坊のぼくを、母さんが笑顔で抱きかかえている。あるいは父さんが。そしてぼくは、風呂に入れられ、お祖母ちゃんに洗われている。

「家族というのがなにかは分かるな？」

「ぼくたちのことじゃない」

すぐさま父さんの拳が飛んできて、頬骨が砕かれる。焼け付くような痛みの中かで、ぼくは呼吸だけを繰り返した。

「ぼくたちはもう家族じゃない！」

バシッ。単調だがすさまじい痛みの連続。自分がどんどん壊されていく感覚。父さんが部屋を出ていったあと、椅子の上で、ぼくは静かにむせび泣いた。苦痛がただの肉体的なものなら、ぼくはあれほど絶望的にはならなかった。弟と、赤ん坊のことを想い、ぼくはしばらく泣いていた。

あとはみなさんの知つてのとおりだ。言っておくが、ぼくは将来、どんな形であれ、彼らの死を悼むことはない。マッチを赤いカーペットに投げ込み、燃え盛る炎を見たとき、ぼくがどれほど、これ以上となく幸福な気持ちを抱いたか。寝室のベッドが軋み、「貴方だけを愛して」が流され、祖母が聞き耳をたて、カーテンは閉め切

られていた。あの日、人生のターニング・ポイントに。

昨日、みなさんが撮ったぼくの写真は、あまりにも父さんそっくりだ。残酷な話だが、大人になっても、ぼくは煙草だけは吸わないことにする。

(終)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7283h/>

---

歪（短編集）

2010年10月25日02時09分発行